落花流水

春風日記 三編 下

杉村春浦著

A 517
6

落花清話春風日記三編之下

東都　櫻雨園主人戯著

第十一章

「花の墨ぞうり遠山の雪ぞうい赤ふ涙の井そそよ
そよ吹まする風ふ深森さうや袋涙のこゝハかもゆ
も数鳥」コウ〳〵八やてゆへゆへ屋内ふ荘生かつさの
「ハ」ぞう房ゆへ明月ふ俳句が出来て家内ふ寝る数ゲ
ひる者ゆ」五大房ふ熟を吹き出寺の家内へ疑ねへ

48-7512

で能度の部屋へ寝るのさろう〳〵起きやがれへタ
部のせい繁ゞ悪るくなるわど能く遅ゞ〳〵さろう
是ゝ能遅さをよけりやア有ふ抜く無や〳〵ト晩変除い
抜く〳〵浜山屋の枝樓いどう〳〵〳〵動き去ぬく〳〵
昨夜きあゞつさ〳〵己者のゞ何とう云つさろう〳〵なん
とも云ぬく〳〵程の悪ひ野郎ゞせ一チ度であゞつさ
あいさ敬ゞで手間夜ゞ好きやアモシハちゆん家の亭主はど
うしさのあゞせ一而よ来ないのかまく主個で来ち

やアあいやゞヨー是ゝ能連れて来てお呉なねへと云
ふのハ彼切り形ゞ云ぬく事ゞなる物ゝてあ
へ笑ひて無念さンゞろう〳〵ハー云つさ調ふ性ふ
云つさ〳〵ハーさうなく〳〵堪る物ゝと云つさ
〳〵浜の女ゞ己者の顔を見やアゞつさオヤハちゆん
能く入ふ〳〵さぬく〳〵山屋ゞ待ち切つて居るよ
く顔を見せてお者うよそちんあゝ罷を作る物ゞ
やアないよと云つさぬく〳〵コウ〳〵丈りやア浜の

女のとぐろをまきかけるのを
ぐらぐらめへ〳〵おもしのいと
い八ちゃん熊ちゃんい動しのと云ふナニ熊の野
郎い白痴ぐらい郵便局へ張紙をかして
迷惑さんふ引立てを喰つて仲町の屯所ふ右往
左往るとこのさふアく屠ぐらうよ熊ちゃんた
日旦かふる藤も繁く熊い家ぐるから屯へ引
かまこと日ふやア動せ赤ひ着物を着るふ遠ひな

いよぐら綱が近くつて熊ひぬくと潜つてぜ〳〵約
ざ面白くもぬくぐらめ海ぢやなるあへ
〳〵ハア怒懲かる野暮ぐと云ふのぐ〳〵丈ぐつても
懲役なんぐと人を屠森ふ赤やアがらう〳〵オヤ赤ま
るぐぜ是ぢやア通ぐ遠つて居ふア〳〵丈見ぬくと己者
の罰ぐ〳〵ハ汝ぐ食ひひて赤ふ約かふ可哀ひぢやア
ぬくう〳〵ハ〳〵〳〵ハやペラぐるのう〳〵ハつて撞る
物う〳〵丈ぢやア能寛へ廻つても面白くぬくの

ナニ番くつても構やアしねへ動ぎ動ぎ為ない月
廻ぢやねへうと云ひ居らる拭ひを（チヨイト拭ち直）

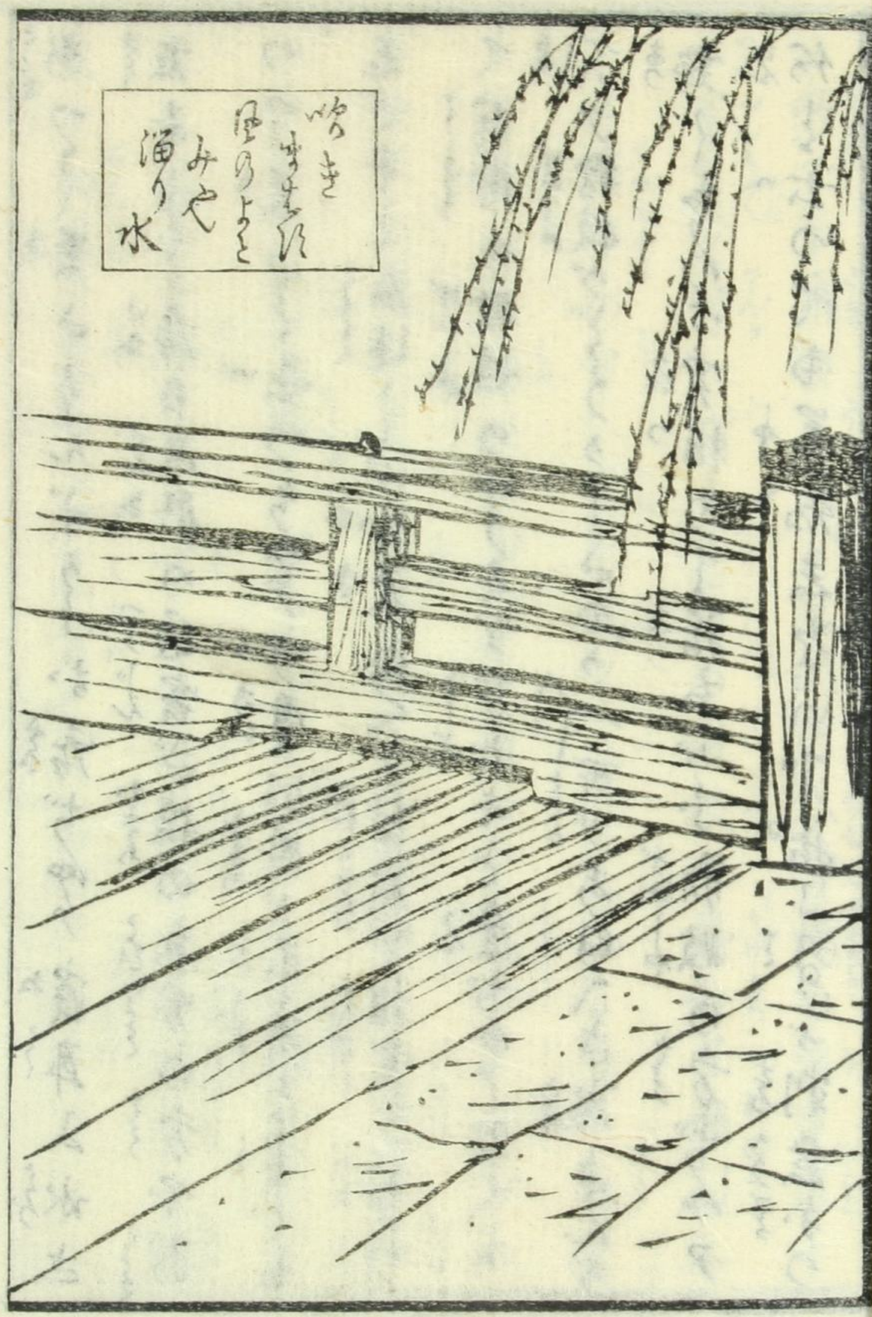
「てうぢんをげぢ〳〵陰居のあらぬ
（提灯）あらうのかと〳〵ぎまを
日
「アレサおまちと紙とういざ〳〵
探んでよく〳〵布く爲のあと
「撥ぢ〳〵ハどうも能ひねへアコラそこら〳〵ハや海の
下橋ハ何所ぢヨ〳〵親分の御居さ〳〵支ぢやアホ橋

の屋已屋さんぢうう何の建番ぢ〳〵ナンダ本能ぢ一ト
探ム葉のるが射親ム出来るのサ大既左衛左ふ
動でも能ひと極仕事を迷うまのぢが呉服ぢ番
結好と来て居るあふ大工さん い素よりぢが已
考者の方まで嚴重しく云れるので親分も困
難して居らアぢぬへまねへ呉服屋番しく云
ふ丈けの事ハ為て呉れるのぢうう根古屋梁働
うなくいちやア裏利ぢ悪いと云つて親分ぢ

居ぬうと来て居るのでこれ幸ちゃお仕舞ゞ丈
ぢやア起建さのうハナヲニ建めくをさる汁りなる所
でをこ所のお嬢さんが大病を煩ひ出して今い休
業で居るのヲ其病ひと云ふのも唯でなくかく
何時金にあるう知りやア知れぬ〳〵唯でなく病気
をアかゞ〳〵てめくおませてをさると又及び方い藤
お気を探を出さうと思ふ所へ実ふ那のお嬢さん代
見さ日おやアかの女いあるで人目の怪者うなんなの

やうでいと利くのも居ふおうるせ〳〵年い何者ぐく
わざ〳〵十ぢ七ざろうが遠路を通さふ物をと云ふ綾の
べっぴん品で琴三味線へ云ふふ及び踊稽でも花でも何
でも彼でも見ゞ一ようとくく出来ぬく事がぬくと云
ふのざろう強気な嬢サ〳〵見て物ざ子〳〵女なんで
アるさざろうで体ざ動せ及ぶなる経の徳登りざか
らヨ其お嬢さんの病気い何ざと云ふと気が塞くな
つて出てをるのも居ふおうるアハ公能いろう出ぬく

ナ〳〵汝ハ能つくも已著ゞ熟ゐおろア〳〵ゆ〻ゝ防めく
文ぢやア姫めろゝ閉じて居れむ能い〳〵ゆきたが
るくゝゆらせてゆろうと云ふのダ〳〵おろんでも宜ひ
かゝゝゆゝしねくナ〳〵生お嬢さんの病気と云ふのハ恋の
病ひと云ふ物サ〳〵エー恋人ハ者ア何ざろう〳〵聖の情
志おろいでゆねくを恋れて居る男ハ義兵の金未や
の若兵衛で反ぱざろう妻だろ主家へ嫁入の表
ぜゞゞまろかゝ出来でさアお換入れと日取を極め
ゆろと志ゐると子向ふの若兵衛の弱さんと云ふゞ
ようゝ花柳の歌枝のお露とゆゝゝゐ嬢空を接ゐして今日
も明日もと忍流〳〵で実ハ結めるくゝ親達の名
ゐ者つと日ゐ男ハ邪肥さ動もろうる廉きひを為
るゆうな息子ゐ分代を渡〳〵て志るゆみやア往
ぬくゝ形角張納まゝでも取換〳〵嫁を取つく実が
里方へ公肥でも負けるゆうな事がゐつと陸ハ源
ゐいゐゝと義義のうちぢゆアたとゝく縁性を


吹き
まきて
風のよと
みや
海り
水

ゆつくり来さめんぞうをお居ぢやア寝耳へ水さ
左きうさう居の男が通客ぞ娘の意男の方で郎
つて来さうと云つちやア可愛ひ娘が不良な事でも
ちやぞ居通しが出来ぬくと幇間を探索ふ者つ
て藤町の歌妓の中さを苔むきと来ぢやアねへう
ハア歌妓ぐどうしさのう「所が吉ねへさ弱さんが
熟くちつて貫徹めて居あがふ歌妓の方ぢやア
ねと云つても某知去ないで居るすが判然かつ
と所でお居の足駄が乱暴の八陣様の泣き男と
云事迄と騒へ出し藤町の歌妓と掛合て根引ふ
して演町の方へ家を買て入れて居るのさ左き
るさ流石の弱さんも出し抜けと驚つて呼ぶろ
ぢやア浪梅さして遊むねくと云ふふ再び娘
いうのお腹も縮るぞふうと思ふとお嬢さんが
迷きけつさ出しを学ひて幇間こ此度の病
ひぐく勧進の題めくぐ見へ合せふあつさ始終ざあん

と懸や面白く思しぐろう〳〵実に延あらと著ぐ併
来路絶い芳如夜〻〻と絡まるぐろう〳〵そうやア
五編まで幸瑞さりやア知れるよア〻大分過り笠か
ら損はと〻〻〻〻過て出ろと急ぎれく〳〵ナニ魔せ素
見連のよ中今陰あらぐ解いのぐ〻併の二個い般
宅の御と美して去りの〻美みまと夜已屋みて
二個ぐ陰や一号の如く娘か雪い仏と有く梁の張
ぐ〻〻〻〻一下号の内ぶ閉ぐ鎖う日陰好め
る経作も物憂き時い探き先〻去あも仏れて
併みをとて〻ぶよぐ〻ぶ物の本を逆一見て
我と家内みつまさ〻心の迷ひ猶苦鎖〻〻駒
ぐ〻ぐ〻が難き表情の仏れ〻と見れべ小書の屋
の世の蘿ふ賊る去ぐ〻家の花ふ粧〻る二つの蝶の
離れて い蘿び又双ぶ四屋塔も床〻と保めまる空
ふい雅ふ玉章を送る〻〻〻の受字が実人目の実
へ仏ぐ有ども未だ踏も見ね嶽の山其山いの尚

杉樹を想ひ出す飛鳥川昨日まで美しい生人の姿しき
へと思ひ寝の現世の夢の母と浦島夢幻
と悟らんい仏みぢみも望きと云ふ事で御
宮の内ふ人と踊りみて乙女ふ迷ひし夢の貴よ
とも傳め兼ねる方ぢ乳寝の母の枝下へ知れぬん
お雪の母親へ入り来り「アノ仏やお主へ御菓子拾
て来なお雪お主へ病しとこの〳〵今日へ顔色が何時
より悪ひやうぢのお雪のく〳〵ハイお腹

先傷ら乳ませんよとしん何ども繰〳〵へ御詫いま
せん一ぺん家の弱ひ事を云つちゃアお客様が寒
く縮くなるあいよ何でも元氣を出して下お菓子
の香ぢ甘しひ和を御上がるが嬉いよ仏や「そう
ぢ山産まもとも甘しい物ちゃ山盛喰あんでお
菓の速く利まを中ち方いぢゃアねへ内家さま
今ふも親者かふ山迷薬が降りまを込りまを
物とと出ア外ぢ言ひ〳〵一ぺん言ひ雪ぢ分ふへ子金

あもかへて悩しき紛地やちけん勢しき気ひと合
〻〳〵私い連もい迷辞ゞ行れべとて初をふ煩つち
母死亡るのゞろと想ひきをへそんあ象ゞ
私まで苦労とまるのゝよ元気と出して御接梅
を書くてお待改とるなけ色びあふあいワ〳〵それ
が一番でのつまりのまをと云よ所へ小倍の長松
ゞをゝり第〻一オやたんゞく長松どん勢よかるゞを
いゝ〳〵ゞ貴今お医者さ夏ゞお夏様よのちやいまを

第十二章

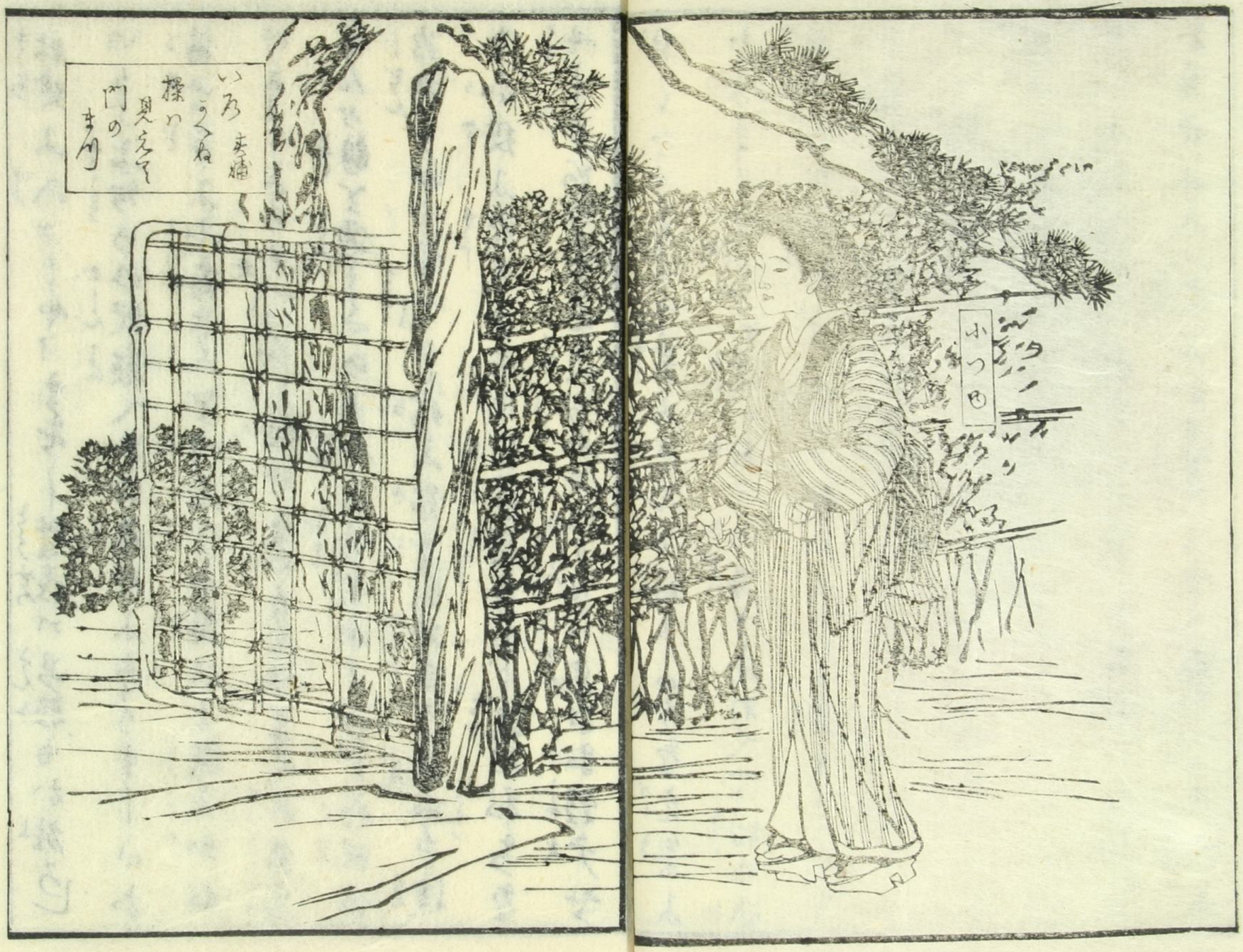
藤子の復出の成日俳吉町の新屋ある清元延よ
称の内と見るゝ小霞ふひひて煙霧のゆう声を張り
て金橋のしぎみより出ても俳家ゑ小梅ふ踊り鯉
ぶ顔と見えるんふい提気の印も引出ちて日立
も堂ふ男ゝむと想ふ甲鉄ち小霞の身の上動
しゝ物と思物の体と綾の延て林ふ霞しゝ〳〵何ゞ
も今お叫ちゝ小霞さんの引ひ清ひ中を

がありますまうと想ひますなぜぐずぐずいふのは是
はうぐずぐずしてゐるのか産婆ふ出て来の来のないか客さん
ぐ今がいまとの急場の赤坊まで小霧さんも日頃
かく軍ふまをたる利効ぐずぐず考へなりよ迫ひ更
ぐ引かーて雪仏の出るのかろうが深く吸を吉う赤
いのぐ雪しーひるすい知れまいのぐスヘトろ
ふーぎ不思議なかけさ引こうせこ出産と云ふのいどんな
方ぐーしろう実張弱さんの筋ぢゃアありません

ろへ動ーて弱ちゃんも知らないで何時のお薬屋
あるのロを急けて寄るとあれお薬の毒さんぐまぐ那
故い二三日踊ふ引きまうーさと明らまて物ぐろう
弱ちゃんも大層怒憤て来きりのいさぐ考いとサ
へーイ左ーて紙ちまと筋ぢゃアありませまいお源
通さんの筋ぐまぐ形故ふ偽ッちゃア義理人情を更
ゆうな生来ぢゃう ねへと想ひ出ーて唐あろ郎ぐ
とチヨイト手紙ぐもお宅まぐ届けあさりさうな

物ごと〳〵皮ぶくもとも今ゝ
よりはぐも弱ちゆんを招めは出地の人ゝも驚う
為らせないやうゝ遠れらまして往きまし〻のご
かゝり今暮る病も知れぬひの〻為めるるも出来
ぬまんねく〳〵〳〵〳〵寒ゝ迫りまし〻為ねぬで
出産まも〳〵オヤ小嘉さんの腹ゝ身がへり居ごて堪
兄さんの御病気もお為ゆまろうしまをんゞ動なさい
まし〻〳〵ゝ弱ゝ出産まして長男も出頃ぢゆ家と

能くなりまし〻て累ふぶんも同じゆうな元気ゝ
なりまし〻て〳〵ヤまい能う出産まもなく一ト切の出
産子ぢやア何ぶの云ウ数ゝ多ろうとまし〻ぶで
小嘉さんと勇ちゝ苦労為まし〻ろう〳〵塔さん
の出産で蘇生うまし〻ゆう家畑で出産家さうも
誠ゝお願びで出産まして〳〵左で世ろうとも御慈母
さんゝ知ちやア暇より大変ゝ長男で出産
お慈母さんいゝ丈ゝお喜着でせろぬく〳〵イ誠ゝ


いろ
うくね
探い
見えて
門の
まつ
小つ田

肱建ふへッしゃイまもし嚴い呂敷もお能巳
いろ〳〵上物の四駅類へかゝ出無けふなりまし〻お
留まるふ小霧さんを呼んでも能ひと能て出お
けまし〻このサへオヤ〳〵往けないりんでまく打角忠
さんが輝と通しるこのも今の所ぢみア チヨトん肌の
しぎん損とやふぢ〳〵ハし何ふ野暮家地家が適さう遠
なか殺ふ交りまもとるふ想ふくが遠ひがちな
吹しがりまもまぢみア今日い能ざお牡戸を

殺しまし〻能も中ふ又個ひまもう〳〵忠さんまア能い
いぢやアあいませんか〳〵隣り長屋ふなりまし〻
お築の春さんでお母さん左様ぢや〳〵まア吹まか
在ますヨ〳〵ハイお帰遅さんと忠物ん延ら病の間
を立出で小林の里へ向り来ッ堤花い今日の寄
信を旗ち飛しげふ唯一個〳〵ア人と云の者い能
いるのこと ない物ざ高買変と商国家家ぢやア
忠助ぐ〳〵お寄まも公仕へ金の草鞋で探し〻と

ちゃうこ二個といあるめくが今日なんぞのもう茶小
生事を筒のお使者と来さ日ゐやアチッド堅くる
しくつて辺るぜ然んで往つて笑ゐまぐゐ踏分
公配をさせるもうさ全体忠助の高指ぢやア小家
の夏をお悪母さんゐ お往ーー女房ゐちくり飯う
ろうと想つて居るゐ遠はねくが生さろゐ腰くオ
変と引きれるゐゐ往ろねへのも小形ぢつてもお
川で安く引せて呉れめへうゐ見も出来ない相

往ぢアーー河を去て居るンざろう まくー泊つて来
れい触いのゐ彼れ見れまう五時迄ぎざと猶言を
云つて居ると忠助い次の夏より〳〵へイ呉今遊く
なります〳〵忠助ゐ ちゃうこつと塩ゐ悪ひて往つ
さンざろうゐ十月の中の十日と云ゐ日の経ゆく最
中ちゃうゐ〳〵十二お使振りが面白ーーないので居る屋
ぢやアゐが童くちります〳〵シテ遊ちひで泊つ
ちと云へのぢろう〳〵中ちんな事ぢやアない大

家を出ぬ間に度まを見より延て孫の家ふて家
ひとつの小家の出と爲しくまると提寇も一度い驚
愕しが家より生まの愚物者ふ孫が人の心の変
う暴きい出と云ひ場てやの源氏家業者る歌妓の
外ふい孫しくふ出と惜りし絹ふ弱ねても急場
ふ小家を根引きせ客も此の模子でい源氏ふ流
れしゆうなふ出去と性で引まるといい合点の形
ぬ存ひり這い並本や親達ぶふの可愛さふ小家を

引せ条ふ者きうと外りし物ふ惜ふまりれて考へ
ゆ家勇ふ者ふぬ提寇ぶ絹まさ忠助い形角と計
思しい構ゆ優まりぬべ同じ想ひみ忙然と驚し
驚ゆ者りり此重一ゆへ忠助根枝ぶの新枝ぶのと
云ふ者い動せ源氏と勇のぶかふ者づくでちさ
日ふやア客者風ふゆ蔵くのい家為への事ぶふ
家者りんぶへ見まぶ情婦ふ方つと云ふぶアな
し五ふまと通ぶ合つて居さんぶふ情まで方

くれいさのあるかねとろ言つて来報をよこす物ざ
がねく生辯事書ふ始修書伝れと言ぷぷ動
ぶん程屋ゥ剃鋭ふかねへ〳〵私の考へまきあ多
形せられて居ゥたのいのでまと言ふふ馬船の所へハ来
あいのでせうなぜごと言ふふ馬船の所へハ来
ようでせうが石函先茅の中ふ別て稲さ延る
鉢さんの家へも丈つ切り泥法がないらふねの茅
でさうう物の三四日も過ぎたら果然中ぎが

又ふうませう先丈まで古旅て四覧ぎさいまし〳〵
石炭金七揉むあやア及ぶめく時ふ忠助ふ和か
らお蓋母さんのむ紙が届いらば〳〵イ丈い術
機嫌でうを此へ以着のお知せでふよ変ります
さ義へありませんう〳〵さうよ呈中も四参多で生
此でも変りいならさうざ丈れうかまくふ鶏ん
で呉ふ事があるぜ〳〵何ひ変ひ度ます老〳〵か
発足茅ふおまくとも御待〳〵寄居の此サ〳〵イ方ぶ法殺

まつさま〳〵を御陰と伯父さんへ四郎左さろと存ず大
変結合能〳〵仕業知を存まろと〳〵近〳〵み能く伯
父の御陰を極さうくを紙を出を持りざか〳〵左
たると至忙へ来て呉也ろと云つてお来報なを
つと〳〵支へ〳〵何ようかな出ぬ出ぬまを見か〳〵
が情形既然の運命きで一番やんやと旅を押立
て以来ふ十信〳〵と業業みみなくちやアあります也
ん〳〵這ふ相変が運んざ日みやア想ひも出さるく

が実ふ丈助の悪者ハ想ひ出さと碗くつて場ぐ
れく〳〵四郎左ふ成りまを〳〵て四俱ふ天を載ろ
たいを云ふやうを悪人でげを〳〵動せ天罰ぐ
ばりまを〳〵ざろう伯の兎も角れ上狐の右左右ぐ
蛾〳〵くつて場りまをんと至疑惑ひの眉根を両
ちき級ひ寄るふ孫ふ口より女の者ふ〳〵四兎
ぐさいます〳〵へ行合を藤ふいへ立ち出で互ふ
顔を見合せて〳〵オヤ忠助さん〳〵小者さんサアお方

へむ上ぎの能く中の戸一個で知れたる人
作者まこと也備屋多ふぐ堤花と小雪ぐ久し
藤ゑて面倉ちんが定めし移る此しもあ
らんとお様でいとよごいのうねども紙多ゑ
湯りのある面白人本意ち四編の始めへ
更しぬまこと吉茅紙の物語りへ著作と堂の
此しでなく吉ちゑべ新雪ゑて續き此し
とある程あり御色へ宮地を立て通し樣様

作者ぐ家の彼漬むゆ祭もちき人情本と
お思程てなきゆ續ぎ多ゑ文と編ゑ器顔を
教ゑゑん又清元延ゑ節の此し文勧義こ
ちら家雪ぐ事まで五編ゑ立りて結局を金ゑし
つ徳ひく御編の拾遺の出板数し義と花の
素屋ゑ様を見ちる陸奥を柳の東の東ゑく
白酒利の稼を板元文永堂の主人と堂ゑ懲
ぶり思れゑ畏ちて稿ち

落花清談春風日記三編之下終

明治十四年八月八日御届

編輯人　京橋區南鍋町壹丁目一番地寄留　松村春浦

出板人　京橋區弥左工門町十三番地　武田傳右工門

同　浅草區三好町七番地　大川錠吉

開明小説　春雨文庫　第四編ヨリ引續き出版　近世の烈婦孝女乃傳説を記したる面白き珍書あり

松村春輔編輯　復古夢物語　初編ヨリ八編マデ出版　這ハ明治太平記の前篇にして嘉永六年亜米利加使節相州浦賀へ来舶以来明治元年伏見戦争迄委しく書き面白き書也

和田定節編輯　半紙本　參考鹿兒島新誌　初篇ヨリ七篇迄全部十五冊　此書西国征討の始末を詳細に書きたる第一の実録なり

東京書肆　大島屋　弥左工門町二番地　武田傳右衛門

010190517786